

第2回 地域と公共交通の関わり

広報ふちゅう12月号では、福山市立大学の渡邊教授に、クルマと公共交通の関係のお話を伺いました。今回は、呉工業高等専門学校の神田教授に、地域の公共交通が衰退することの危険と、無理なく楽しく公共交通に親しむ方法を伺います。

問い合わせ先
都市デザイン課 (☎43-7159)



公共交通を使わないということは、知らず知らずのうちに
地域を衰退させているということ。
でも、多くの皆さんはそれに気づいていない。



呉工業高等専門学校 環境都市工学分野
教授 神田佑亮さん

公共交通を守ることは、 郷土を守ることにつながる

神田教授は、「実は運転できないと困る人は、高齢者だけではありません。公共交通は、若い人の足を支えているという視点を忘れないでほしいですね。」と指摘しました。

さらに、「地域によっては鉄道やバスがなくなると、進学先の都会から自力での帰省が難しい学生がいます。遠くの塾に通う学生も自力で帰宅できる地域と、送迎が必要な地域では、負担が違いますよね。親が運転するクルマがないと移動ができない地域に、果たして学生は帰って来たいと思うのでしょうか。「そんなのは極論でしょ」と思われるかもしれませんが、公共交通を使わないということは、知らず知らずのうちに地域の魅力を衰退させているということです。この問題は、普段クルマを使う人にこそ、考えてもらいたいですね。」と話されました。

つまり、公共交通を利用し、守る意識を持つことは、地域の今後を考え、地域そのものを守ることにつながっているということ。その意識について、神田教授は、こう説明します。「公共交通を乗って残そうという運動や意識のことを『マイバス・マイルール』と呼ぶことがあります。これは交通の利便に関する問題に留まらず『私たちの郷土を守る運動や意識』のことです。個人で積極的にバスへ乗ろうと取り組むことはもちろん大切ですが、郷土を守るためには集団、つまり地域全体の取り組みであると認識することが、特に重要となります。」

合言葉は、 「みんなが」「楽しく」

しかし、急に公共交通を利用しようと言われても、「今までずっとクルマで生活して、急にバスや電車だけで生活なんて不可能」「そもそも、どうやって乗るか分からない」「どこを走っ

公共交通を 安心して ご利用ください



株式会社中国バス 府中営業所
とホームページ



新型コロナウイルス感染症拡大の影響は計り知れません。当初は、密が不安視されたバスや鉄道ですが、令和2年12月時点車内でクラスターが発生したとの報告はありません。その予防方法は主に2つです。間隔を空けて座席を利用してもらい、小まめに消毒をすること。もう一つは、バス車内の十分な換気です。従来の換気システムに加え、窓を開放して走行するなど対策を行っています。基本的なことですが、日本バス協会のガイドラインに基づいて、皆さんが安心して利用できるよう、日々努力しております。



株式会社中国バス 府中営業所
谷本康平さん

私たちは、お客様に安心してご乗車いただけるよう、常に換気や消毒に努めています。皆さまも公共交通3つの約束を守っていただき、安心して公共交通をご利用ください。



運転席近くの座席利用を控えていただき、飛沫感染を防止しています。手すりやつり革など、接触の多い場所は小まめに消毒しています。

バス車内の強力な換気の実証映像がご覧いただけます。



感染リスクを大きく下げる 公共交通3つの約束

- 1 常にマスクを身に付けて
- 2 車内換気にご協力を
- 3 会話は小声で穏やかに

神田流

バスや電車に親しむ3か条

- 一、まずは一回乗ってみる。
- 二、みんなに乗ってみる。
- 三、楽しい使い方で乗ってみる。

ているのかも知らない」と思われた人もおられるでしょう。教授は、次の提案をしてくださいます。「普段、公共交通に乗っていない人がいきなり一人で乗るのは、不安が大きすぎる。無理があると持続しません。そうではなく、『みんながカバする』という考え方にシフトしていきましよう。どうやったら、みんなが、楽しく使うことができるのか、その工夫が鍵ですね。一人一人のライフスタイルや、移動の目的にあったバスや鉄道の使い方を再発見し、楽しく使うことが大事です。」

ただし、乗車のきつかけが、通勤や通院などの生活に密着したことに限定される必要はありません。あるユニークな事例があります。京都市内の町内会のイベントで、近所のお寺までバスに乗り、座禅を組んで帰った。

「バスがこんなにも便利とは思わなかった」と利用の意識変化がありました。「ちょっとしたイベントでも、意識の変化が起こるのです。乗り方が分からないから不安だから乗らないと思う人もいます。そんな人こそ、楽しいイベントを通じて、みんなに乗ってみることが鍵となります。それが郷土の移動手段を、ひいては郷土そのものを守る第一歩となるのではないのでしょうか。そう思ってくれる人が、どんどん増えてくれることを望んでいます。」と神田教授は思いを語られました。